四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol 51

水に関する思い出

四国地方整備局河川部　河川調査官

大谷（おおたに）　博信（ひろのぶ）

こんにちは、四国地方整備局、河川部河川調査官の大谷です。

平成 16 年、17 年は度重なる大規模洪水や異常渇水により、四国中で甚大な被害が発生しました。今年も例年にない春先の出水があり、改めて治水の重要性、難しさを感じています。

私自身も過去 2 回の床上浸水と数回の渇水経験があります。床上浸水は小学生時代のことですが、初めは高知県中村市（現四万十市）に住んでいた頃です。おそらく昭和 36 年の第 2 室戸台風だったと思います。当時は、家財も無く（たぶんテレビも無かったと思います。）、住んでいたのは木造 2 階建てのため、畳を 2 階に上げていたのを覚えているくらいです。

2 度目の浸水は香川県高松市で経験しました。当時住んでいたのは、宮脇町 2 丁目通称バーガ池と呼ばれる地区の一番標高の低い所でした。記憶に残るような洪水でもないのに、床上浸水しました。おそらく洪水と高潮が重なったため、標高の低い我が家と周辺数戸が浸水したのでしょう。このときは木造平屋建てで、タンスがだめになったり、壁が壊れたりしました。記憶に残っているのは、授業中に呼び出され家に帰ると、道の途中から我が家の玄関先まで仮説桟橋が架かっていたことです。

2 回の床上浸水とも畳が濡れないよう上げられていました。当時どのようにして、浸水情報を得たのか、また誰が畳を上げたのか？子供だった私には分からないままです。

一方、高松市での生活が長い私にとって、渇水は子供の頃から幾度と無く経験してきたことです。特に「高松砂漠」と呼ばれた昭和 48 年渇水は、記憶に残る渇水でした。当時大学生で近畿地方に住んでいましたが、夏休みになると同時に家に帰るよう連絡を受け、高松に戻りました。渇水だから戻って来るなと言われるかと思っておりましたが、水汲み（水運び）の人手が必要だったのです。当時は一家 4 人で高松市潟元（屋島の近く）のアパートに住んでいましたが、自衛隊の給水車が来るたびに、炎天下にならび水を運びました。我が家は弟（当時高校生）と私の男手がありましたが、老人や女性しかいない家族には過酷な状況でした。今のようなポリタンクも無く、バケツやヤカンで水を運んでいました。たしか市内で水運びの老人が亡くなったというニュースも流れたはずです。

また、町に出ても飲食店の食器が紙製品（洗う水が無いため）になったり、商店街がほこりっぽく感じたものです。

このような経験を踏まえ、採用面接で「河川と道路どちらが興味ありますか？」と聞かれたとき、ためらいなく河川事業と答えた記憶があります。あれから 30 年近く経ち 21 世紀となった今でも、まだまだ治水、利水ともに安全度の低い四国地方ですが、1 日でも早く洪水や渇水被害の生じないよう努めたいと思っております。

高松市の浸水状況

給水車に並ぶ市民の様子